

寄稿論説

橋に潜む文化

Cultures Latent in Bridges

金沢大学工学部長
The Dean of Faculty of Technology
of Kanazawa Univ.

小堀為雄
Tameo KOBORI



1. 小説の中の橋

先日、差別との闘いを描いた映画「橋のない川」の試写会にいった。原作は住井すゑさんで、監督は東陽一さんである。一つの木橋を中心に繰り広げられる人と人のぶつけ合い、葛藤の場が人間愛の中に描かれていた。主演の大谷直子と高橋悦史が雨降る橋の上で大人同士の慕情を交わしあう。「僕にも家があり、家族があるのでここへ来ることはできない」「私はかまいません」と傘の中でぽつりとした会話、「でもそれは無理ですよね」。橋という人々の暮らしをつなぐ場所でのささやきが、この映画のクライマックスのように思えた（セリフは照合されていない）。

原作では夫を戦争で失った“ふで”の夢から始まる。夢の中で少女は川の向岸に少年を見つける。少女と少年は呼び合う、少年は上流へ走る。「ああ、どこかに橋があるはずや」「あ、橋が……」。しかし、それは大きな虹であった。二人は下流に向かって走る。しかし、そこにも橋がない。どうしても合えない。ふでは泣いた。ふでは恋しかった。夫、進吉が恋しかった。ここで夢がさめ現実に戻る。映画は、子供たちが部団旗を持って橋を渡るところから始まる。この橋は、専門書通りに造られた木橋であった。その山辺の風景はスバラシかった。学生諸君にぜひ見せたい気持ちになった。

私の手元に現在、橋という文字が表題についている本が、名著「日本の橋」（保田与重郎著）をはじめとして、いつの間にか50冊近く集まっている。その中に三国一郎さんの「橋」がある。ある時、三国一郎さんの橋という本が出版されたと耳にした。どこかで聞いたことがある名前だな、と思った。橋屋の仲間ではなさそうだ。もしかしてテレビの司会者の三国さんでは、と早速買った。三国さんは橋の専門家ではない。しかし、橋の持つてい

る味わいというか、隠された哲学、橋と人間の心理との美しい、なにか縁のようななかかわりを見い出されたからであろう。ゲオルグ・シンメルの言葉を借りて、「道をつくった人びとはもっとも偉大な人間的事業のひとつを成し遂げたことになる」。そして、「橋をかける行為にいたって、人間固有の作業は、その頂点に達する」と、三国さんには、橋は人と人を結び、社会と社会を結ぶ、この世の縁結びの神と映り、愛する建造物であり、川とともに人間と自然の縁結びとなるのであろう。橋の専門家と称している私達以上に橋を愛されているように思える。一方、橋は映画「哀愁」（原作名は「ウォータールー・ブリッジ」）や「君の名は」（数寄屋橋）のように悲劇の背景ともなる。

この三国さんの橋の中に、川田工業㈱社長の川田忠樹さんの「吊橋の文化史」が載っている。

私が川田さんにはじめて会ったのは私が大学院を出て神戸市調査室に勤めていた昭和33年頃である。当時の神戸市長は原口忠二郎さんで土木の大先輩である。神戸市の垂水から淡路島までの明石海峡に吊橋をかけ、さらに、鳴門海峡にも橋をかけて本州と四国を結ぼうという大構想のため市長直属の調査室をつくり、そこで本州四国連絡橋の調査、計画、基本設計に当たっていた。その時、神戸市が東大の橋梁研究室へ吊橋の風洞実験を依頼していた。その実験を視察にいった時、平井先生のもとで吊橋の研究をされていた。てっきり土木工学の出身の方だと思っていたが、あとで、東京外大のフランス語の出身と聞いて驚いた。

その後、私は金沢大学へ移り、川田さんは川田工業に入社され、大阪支店勤務となり、色々とお付き合いを願った。そして、「吊橋の設計と施工」という専門書を出された。私などは橋の専門家と称しながらなかなか書けないのに、川田さんは文系から橋屋になられた。その勉強

ぶりは大変なもので、あるときは列車の中で計算書を出され、この式はどうだ、この理論はおかしいのではないか、と聞かれ返答に窮した。

その後、先の「吊橋の文化史」、「ブルックリン物語」や「だれがタコマを墜としたか」など、橋の本を沢山出され、橋の持つ人と人のかかわりの追求に努められている姿はスバラシイものがある。

このように橋は文学の世界の中に、その心が生きているようである。

2. 橋と民族性

さて、文学の中に潜む橋にも民族性や国民性、そして風土が現れているように思える。

例えば、日本古来の橋は木橋で非常に素朴な形で、流されてもまた造るということが繰り返されてきた。イギリスへ行くと橋にも気品があってプライドも高い。不況で困っているときに国の威信をかけて橋をかけたりする。1981年にハンバー橋という世界最長の吊橋をかけた。地震がないから大きい割にスマートなものができたのであろう。1410mもある。エリザベス女王が来てテープカットをするという力の入れようである。写真-1は、ハンバー橋と同じタイプのやはりイギリスのセバーン橋である。



写真-1 イギリスの代表的な橋、セバーン橋

そんな肩の張った橋をかけるかと思うと、ロンドンの近郊ケンブリッジにある「マセマテカル・ブリッジ」(写真-2)という木片を集めて造ったような素朴な橋もかけている。最近のイギリスの橋は壮大でいて、しかもスマートなものが多い。

次に、フランスのパリであるが、そんな橋は少ない。パリで代表的な橋を拾うとコンコルド橋(写真-3)であろう。この橋は世界一美しい橋だといわれている。宮殿建築家によるもので、全部石張りである。夜はライトアップしている。



写真-2 ケンブリッジのマセマテカル・ブリッジ

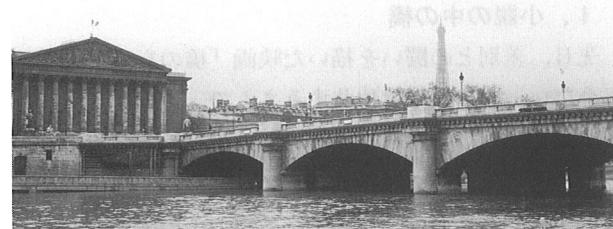


写真-3 フランス（パリ）の代表的な橋、コンコルド橋

ドイツにも個性的な橋がある。日本と違って、橋のアプローチをとても綺麗にしている。例えば、ハンブルグのアスター湖にかかる橋などは橋のたもとに釣りができるような仕掛けがあつたりする(写真-4)。日本だとさしづめこの場所はバリケードを張って「立ち入り禁止」とするところだろう。教育が違うのか、管理者の感覚が違うのか分からない。

ヨーロッパでもアメリカでも橋のたもとが公園になっている。そして公園から橋に上がる歩道橋に螺旋の曲線を使ったりして綺麗にできている(写真-5)。



写真-4 橋の下も市民に開放している
(ドイツ、ハンブルグ)

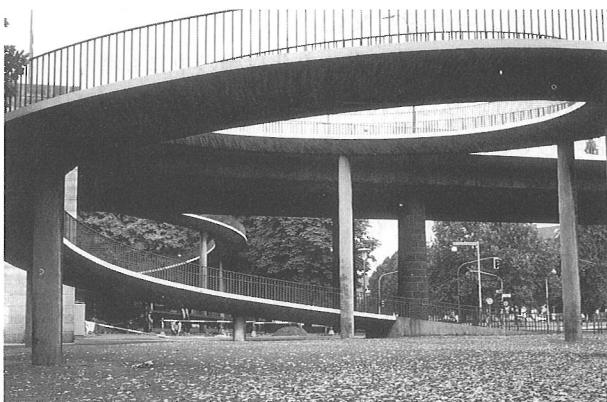


写真-5 アプローチ橋の曲線が美しい
(ドイツ, デュッセルドルフ)



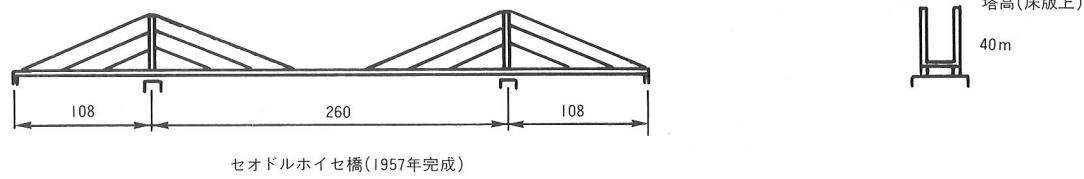
写真-6 ドイツ (ハンブルグ) の斜張橋,
ケーブルブランド橋

次に、最近、流行の斜張橋（写真-6）というのは、ドイツからはじまったと考えられる。一つの例として、デュッセルドルフで1950年代に、ライン川に3つの橋をかける計画をたてた。図-1に示すように、最初のセオドルホイセ橋（1957年）はタワーが両はしに2本ずつ合計4本あり、このタワーで橋桁を吊っている。この斜張橋が成功すると、次のクニー橋（1969年）はタワーを路面の両側に1本ずつ計2本にした。ここは川幅が700 mほどあるから2本のタワーで320 mほど吊っている。

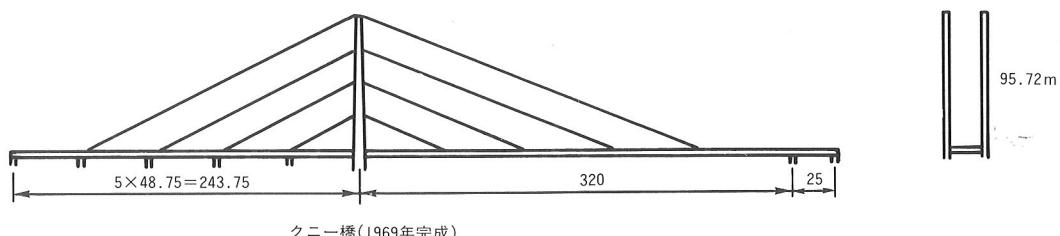
こうして2本のタワーで吊ることができると、つぎは1本でやろうということになり、最後のオーバーカセラ

一橋（1976年、写真-7）は、橋の真ん中にたてた1本のタワーで橋桁を吊ることに成功した。まず上流にかけ、次に下流、そして最後に真ん中をかけた。1本のタワーで橋全体を吊ってシンプルな美しさを追求している。そこにドイツ人の「匠」の精神が生きている。このあたりがドイツ人らしい。日本人ならこんな斜張橋を一度に3つも造らないだろう。あいつが丸い橋をかけたら、おれは四角い橋にするとか、必ずそうなるであろう。ライン川に15年かかって3つの橋をかけて、斜張橋の理念と理論を完成するというのがドイツ人である。

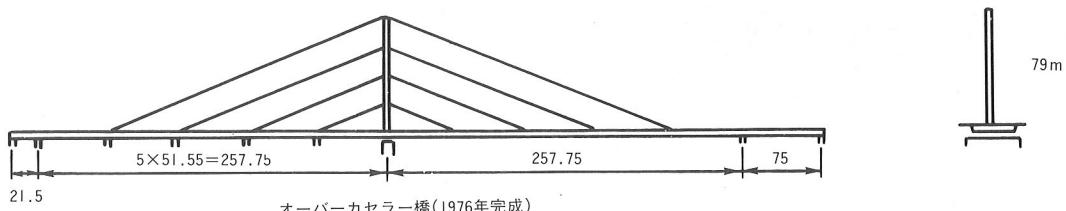
イタリー、特にローマへ来ると芸術の橋が見られ、ア



セオドルホイセ橋(1957年完成)



クニー橋(1969年完成)



オーバーカセラ一橋(1976年完成)

図-1 旧西ドイツの3つのライン橋

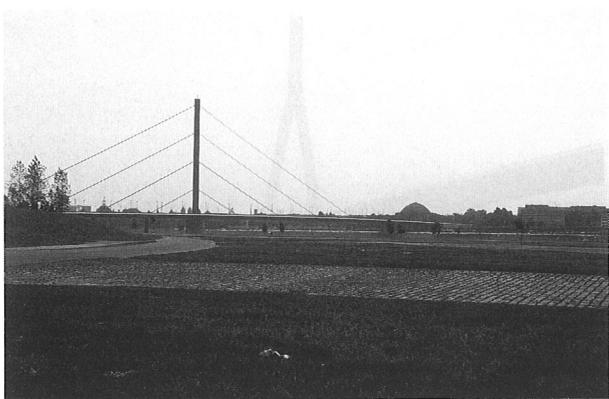


写真-7 斜張橋の極め付け、オーバーカセラー橋
(ドイツ、デュッセルドルフ)

メリカは鉄の文化がつくりだした道路橋、橋梁という橋。中国は、石の橋である。

そこで、日本はどうだろうか。古来、日本の橋は、丸太を二本渡し、それに床版を敷き、土を載せ、土が落ちないように床版の縁に縁木をつけ、さらに渡る人のために手摺（高欄）をつけた、そんな素朴な橋が日本の橋である（写真-8, 9）。戦後の日本はアメリカ文化の影響を受けて鉄の文化になってきた。

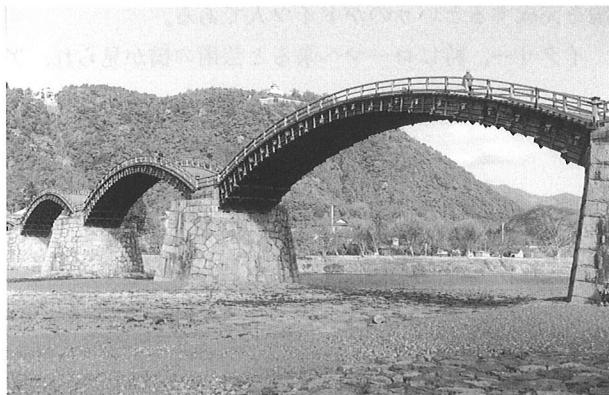


写真-8 日本の橋 (錦帯橋)

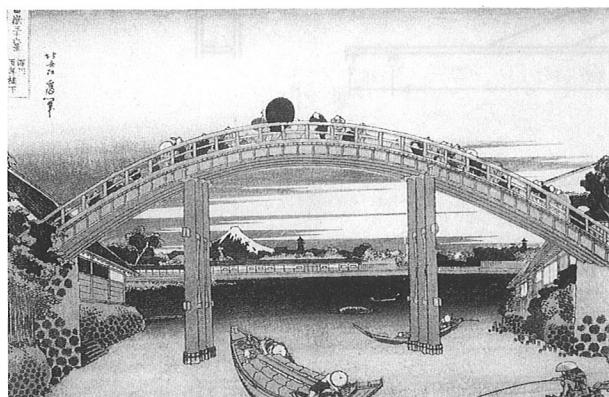


写真-9 日本の橋
(富嶽三十六景 深川万年橋/北斎画)

3. 橋の中に潜む文化

このように見えてくると、文化は橋の中にも潜んでいるように思う。私はこれまで「はし」を一文字の「橋」で表現してきた。それには深い意味がある。すなわち、橋と一文字で表現するときは、その奥に秘められた素朴で美しい人間の心がこもっていると考えている。それは日本の橋であり、神社や寺院の前の橋である。その橋には擬宝珠がついていて、一つの信仰を表している。また、「道」も同様である。「道」と一文字で表現するときは、伊勢参詣の道であり、参勤交代の北陸道であり、東海道である。そこには人間の心がこもっている。そして旅人がちょっと休めるように松の並木があり、一里塚があるように。それが欧米文明が日本に入って来たときに機能本位のものにかわり、一文字の「橋」や「道」は「橋梁」や「道路」と二文字にかわった。そして心が無くなったようと思う。いまここで、二文字から一文字に、橋や道の本来の姿に返したいものである。

それにしても、いま、瀬戸内海でかけている橋梁はアーチ橋があり、吊橋があり、斜張橋がありで世界中のありとあらゆるタイプの橋が並んでいる。日本人の万博好きがよくでている。

橋にも民族性がよく現れているようである。「橋」や「道」の一文字文化の中に潜む心を追求していきたいものである。

小堀先生が「金沢市文化賞」を受賞

文化の振興、発展に功績のあった個人、団体に贈られる平成4年度の金沢市文化賞を茶道家野島宗禎氏、洋画家吉田富士夫氏らと並び、小堀先生が受賞された。

長年の研究が認められ、「橋梁工学を究め、橋梁建設の発展に寄与した」と評価されたものである。先生は現在、都市計画や都市環境など都市づくり政策でも指導的役割を果たしており、石川県都市計画地方審議会委員などを務めている。

編集委員会記